【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　日本・東アジア文化学領域
胡　玉華
【論　　文　　題　　目】　漢語心理動詞歴時演變研究
（中国語の心理活動動詞の歴史的変遷に関する研究）
【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

胡玉華氏が提出した論文「漢語心理動詞歴時演變研究」（中国語の心理活動動詞の歴史的変遷に関する研究）は、独創性に溢れ、着実な検証が行われた優れた研究業績であり、審査委員会は、本研究科に提出する学位論文として博士学位にふさわしい内容であると判断する。

①本論文の位置付け
本論文は、心理活動の“喜悦”（喜ぶ）、“愛好”（好む）、“奇怪”（不思議に思う）の 3 種類の意味を表す動詞を研究対象とし、上古、中古、近世という 3000 年にわたる歴史変遷の中で文法化、語彙化の過程をコーパスの用例に基づいて検証している。これまで、系統的、通時的に行われた事はなく、学界に一石を投じると思われる。

②本論文の示す新知見、独創性
これは、以下の 3 つに集約できる。
１）本論文の最重要箇所は、上記 3 種類の意味を表す同義語、類義語の意味及び用法が「いつ、どのように」変化したのかである。そして、文法化、語彙化してゆく過程をうまく説明できている点にある。
２）語の歴史変遷の中で、「語彙の複音節化」が進んでゆくが、その一つとして逆序語構造（例えば“愛好/好愛”）がある。このうち、現代にまで残存する語彙群（例えば“愛好”）は、大抵「韻律原則」（a：平声が先、仄声が後。b：元音開口度大が先、小が後）に合致するので、逆序語構造の語群にも活用した。
３）もと動詞であったが、歴史の流れの中で虚化し、現代では副詞としてしか機能していないものもあり、その変遷過程を上古から現代まで辿っている。とりわけ「いつの時代に虚化したのか」の回答を“怪道”の語を用いて影印本《紅楼夢》の版本間で書き換えがあった痕跡を発見し、清代中期成書《紅楼夢》に虚化への過渡期であると明示した点は特筆すべきである。したがって、版本間校勘の重要性も示す。（但し、版本間の差異は、全ての動詞に存在するとは限らない）。

③本論文の評価等
本論文の学会での評価は、以下のとおりである。
これまでの 3 年間で、2 回の中国での言語学関係の学会、3 回の日本国内全国・地方大会で口頭発表し、高い評価を得てきた。また、第 4 章及び第 5 章を中心とした研究成果は、学会誌 1 本、地方誌（『紀要』に相当）5 本採録されている。特に、独創性、堅実性が強く要求される学会誌採択は、高い評価を得たといえる。

【最終試験の結果の要旨】

胡玉華氏が提出した論文「漢語心理動詞歴時演變研究」（中国語の心理活動動詞の歴史的変遷に関する研究）を基に平成30年1月9日12:50より14:50まで、文法棟応接室にて審査委員全員（4名）出席のもと審査委員会を実施し、修正論文に基づく最終試験を行った。

本人より学位論文の主旨（研究目的、方法、成果等）について説明された後、各審査委員との間で質疑応答があった。心理活動動詞の語彙について、ある時代のみの研究ではなく上古から現代までの「歴史の流れ」の中で考察しまとめたもので、どの質疑に対しても専門的学識に基づいた応答が適切になされた。それは、本人が大学中文系の現役教員である一斑が垣間見られた内容であった。

この結果、申請された学位論文が博士学位授与に十分値する労作であると確認され、審査委員会は、全会一致で最終試験を合格と判断した。

【審査委員会】

主査　植田　　均
委員　朴　　美子
委員　渡辺　直土
委員　岩田　奇志